

歴博 ぐらしの植物苑だより

第10回 『日本の植物文化を語る』 10月28日(土) 13:30~15:30 本館講堂

「栗の文化・漆の文化—アジアの中の縄文文化—」 山田昌久(首都大学東京)

第94回 『ぐらしの植物苑観察会』 11月25日(土) 13:30~ ぐらしの植物苑

「針葉樹のはなし」 斎木健一 (千葉県立中央博物館)

ぐらしの植物苑今週の見どころ <http://www.rekihaku.ac.jp> 毎週更新

【予告】伝統の古典菊

10月24日(火)~11月26日(日)

1999年以降、歴博では古典菊(嵯峨菊・伊勢菊・肥後菊・江戸菊)の収集・栽培を行なってきました。2000年から『古典菊』として展示を行なってきました。

嵯峨菊



“夢”

嵯峨天皇が大覚寺境内、大沢池の島に自生していた野菊を好んだことから、嵯峨菊と言われたとされる。一鉢に3本仕立て、草丈は約2mに仕立て、殿上から観賞するといわれる。嵯峨菊は中輪で、大きな花芯の周囲に一重の平弁が50余つく、弁は始めはよれているが、満開になると筆先のように立ってくる特徴があります。大覚寺では毎年11月に一般公開をしています。

伊勢菊



“高砂”

嵯峨菊が基本になったといわれています、嵯峨菊が、満開時には筆様になるのと対比的に、花が長く、縮れて垂れ下がるのが特徴です。この独特の垂れ咲きは江戸時代に改良されてできたとされています。色も単色のほか、咲き分けの品種もあります。また大輪の品種を松阪菊といいます。

コブナグサ (イネ科コブナグサ属)

田の縁や湿原に多い一年草。よく枝分かれし、節で曲がりながら立ち上がります。葉の形がフナの形に似るので、小鮎草という。伊豆の八丈島では、カリヤス(刈安)といい、黄八丈を染めるのに煎汁をツバキの灰で発色させて用います。



ススキ (イネ科ススキ属)

尾花といわれ秋の七草の1つです。日当たりのよい山野に普通に生える多年草。屋根をふいたり、お正月やお月見など、ススキはさまざまな形で、生活の中に溶け込んでいます。



カリヤス (イネ科ススキ属)

本州中部の山中の日当たり良いところに生え、全草を乾燥・煮出しし黄色の染料に使うことができます。古名はカイナでオウミカリヤス(近江刈安)ともいいます。媒染や染め方法によって黄色以外にさまざまな色を出すことができます。灰汁と石灰で茶緑色、鉄媒染で黒褐色に染まります。

ニホンハッカ (シソ科ハッカ属)

日本・朝鮮半島の湿地に生える多年生です。葉をもむと特有の臭いがあります。日本特産の産物で、メントールの含有が多いです。1880年代に北海道で栽培が始まりましたが、今はあまり栽培はされていません。



コガマ (ガマ科ガマ属)

浅い湿地から直立する多年草で、ガマに似ますが大きさも小さく、果穂も短いです。ガマの仲間は浦黄(ほおう)とも呼ばれ、乾燥したものを止血剤として用いました。

